

中央大学における研究生生活の総括

Г о л у б е в а П о л и н а В л а д и м и р о в н а

(ゴルベワ・ポリナ・ウラジーミロヴナ)

1. 研究目標とその進捗

研究の初期段階では、19世紀日本における歴史記述と歴史思想の特徴を明らかにするために、頼山陽の『日本外史』を中心に調査を進める予定でした。しかし、研究を進める中で、『日本政記』の史料価値と研究上の重要性に気づき、指導の先生と相談した上で頼山陽の他の歴史書『日本政記』を中心に研究を行ってきました。

『日本政記』は、頼山陽が書いたもう一つの重要な歴史書であり、彼の歴史観や思想をより包括的に理解するために不可欠な資料です。『日本外史』と比較して、『日本政記』はより包括的な内容を持ち、頼山陽の全体的な歴史観を反映しています。研究を進める中で、『日本政記』の方がより包括的かつ体系的に彼の思想を捉えるのに適していることが明らかになりました。

最初の段階では、頼山陽によって書かれた『日本政記』に関連する日本の思想史の文献を徹底的にレビューし、必要な用語や史料編纂の基礎を築くことが重要でした。これにより、研究のための基盤が整い、日本の研究者の論文を参考にしながら、現地調査に代わる情報収集を行いました。また、オンラインリソースやデジタルアーカイブを活用して情報の補完を行い、日本の思想史に対する理解を深めることができました。

次に、頼山陽の伝記的研究を通じて、著者の生き方や影響を与えた歴史的出来事を解明することに取り組みました。比較歴史的方法を用いて、大量の情報を組織化し、用語分析を通じて歴史学と科学思想の用語の使い分けを明確にしました。しかし、用語分析の一部が不十分であったため、関連する専門書や辞典を参照し、用語分析の精度を高める必要があります。また、専門家とのディスカッションを通じて、さらなる深化を図ります。

『日本政記』の具体的な分析においては、著者が重視した点を考察し、北畠親房の『神皇正統記』や新井白石の『読史余論』と江戸時代の他の歴史書との関係を検討しま

した。この過程で、関連文献との比較が一定の成果を上げたものの、一部の関係性分析が不完全であったため、今後は追加資料や新たな研究成果を取り入れ、比較の幅を広げる必要があります。

最終的には、データベースを基に『日本政記』の特徴を解明し、記述モデルや天皇・公家・武家の政権に対する視点、歴史的経過の受容に関する著者の歴史記述方式を検討することを目指しています。これまでの分析結果に基づき、さらに深い解明を進めるために、追加のデータ分析や文献レビューを行い、専門家のアドバイスを受けながら分析方法を改善していく予定です。

2. 今後の計画

今後の研究計画は、これまでの成果を踏まえつつ、未達成の目標を着実に達成していくことを目的としています。以下に、その具体的なステップを示します。

まず、日本で獲得できたオンラインリソースやデジタルアーカイブのアクセスを利用することで、頼山陽『日本政記』・『日本外史』に関連する一次資料の閲覧が可能となり、研究のための取材を継続できます。

次に、様々な研究方法やアプローチの使用に関しては、用語分析の精度を高めるために、関連する専門書や辞典の参照を強化します。また、伝記的研究方法や比較歴史的方法の深化を図るために、日本で得られた研究員とのコネクションのおかげで専門家とのディスカッションを積極的に行い、新たな視点やアプローチを取り入れることを目指します。

『日本政記』・『日本外史』の分析については、北畠親房の『神皇正統記』や新井白石の『読史余論』との関係をさらに深く掘り下げます。追加資料や新たな研究成果を取り入れ、関連文献との比較の幅を広げることで、より包括的な分析を実現します。また、他の関連する歴史書や文献とも比較し、頼山陽の歴史記述の独自性や特徴を明確にします。

MS エクセルを用いたデータベースの作成に関しては、データベースの構造と分析機能を強化するために、追加データの収集を継続します。エクセルの高度な機能を活用し、データの整理と可視化を改善することで、より詳細な分析が可能となります。特に、統計的手法を用いたデータ分析を行い、著者の重視点を明確にするための新し

い指標や視覚化ツールを導入します。

3, 成果評価

本研究を通じて、私は頼山陽の歴史書・歴史意識・歴史記述方式に関する包括的な研究を進め、多くの成果を収めることができました。以下に、これまでの成果を評価します。

資料・史料の取材と閲覧に関しては、日本の思想史に関連する重要な文献を多数参照し、研究のための基礎を固めることができました。特に、日本国内での現地調査を通じて、ロシアでは入手困難な一次資料にアクセスし、研究の信頼性と深みを増すことができました。現地の研究者との交流も有意義であり、彼らの知見を得ることで新たな視点を取り入れることができました。

今後の課題としては、さらなるデータの収集と分析の深化が挙げられます。未達成の目標については、現地調査の強化や追加資料の収集を通じて、より包括的な研究を目指します。

総じて、本研究は頼山陽の歴史意識と近代日本の思想史に関する理解を深める上で重要な進展を遂げ、多くの成果を上げることができました。これからも、さらなる研究を進め、学術的な貢献を果たしていきたいと考えています。

中央大学から、素晴らしい研究環境を提供していただいたことに対しても、深く感謝申し上げます。中央大学の充実した施設と豊富な資料は、私の研究活動において欠かせないものでありました。ここでの研究活動を通じて、多くの知識と洞察を得ることができました。特に、大川真先生には、研究の進展に多大なるご助言とご指導をいただきました。先生の豊富な専門知識と鋭い洞察力、そして研究に対する情熱には、深く感銘を受けました。先生のご指導の下で、私の研究は大いに深まり、新たな視点を得ることができました。先生のご指導と支援がなければ、このような成果を上げることはできなかったでしょう。



受け入れ教員の文学部・大川真教授の授業にて、自身の研究を紹介（2023年10月）